

ある民間企業の定年退職者(男性)より聞いた話である。

昨年の3月に会社を定年退職となり、時間にも余裕ができることなので何か社会に役立つことをしたいと思った。在職中は会社のためということで自分の主義主張を曲げねばならぬこともあり、第2の人生はどんな些細なことでもよいから、自分の意思をそのまま全うできることをしたかった。特に自然保護と環境保全には関心があったし、琵琶湖の水質を守ることは大切なことと思われたので、水環境に関する取組をしたかった。

そこで、4月より心機一転第2の生きがいを探し始めた。妻は早々に手話のボランティアサークルと老人の介護のボランティアを見つけ、活動を始めた。ところが自分はといえば転勤族で地元にもコネはなかったので、とりあえず地元の行政の担当者に相談してみたところ、行政主催の環境保全イベントに参加するか、それがダメなら地元のボランティア団体のリストを渡され、どれかの団体へ参加することを勧められた。担当者からは何事も仲間と一緒にあって一歩ずつと言われた。しかし、これでは会社にいた頃とあまり代わり映えない。妻からは、会社勤めもボランティア活動も同じことと言われたし、なんとなく理屈としてはそうだと思うのだが、現在の選択肢はあまりにも少ないような気がする。俺はダメ人間か…。

彼はたしてダメ人間なのか。確かに自然保護や環境保全活動は、その性格上、法律・条例などの規制や専門的知識によって実施されるものが多く、自分の家の庭いじりのような一般人の勝手気儘な参加を阻んでいるのが現状である。素人が専門知識や管理者の許可なしに自然環境をいじるのは良くない。

しかし現状の環境のボランティア活動は、ダメ人間にはいろいろな意味でハードルが高いことは事実である。かくいう当財団の公募ボランティア活動についても、酷暑の中のヨシ苗づくりや厳寒期のヨシ刈り等々、「お年寄りから幼児まで車のない方や体力のない方でも服を汚すことなく気軽に楽しく参加できます」とは絶対にいえないのが現状である。だからといって自然保護・環境保全ボランティアは高德高能力の人たちの牙城?であったほうがよいのであろうか。

定年を迎え時間のとれる人だけでなく、忙しい人も時間に余裕のある人も、自分の生活の中で事情の許す限りは、何かボランティアで地球環境に貢献したいと思う人は少なくはないと思う。もっと規制を緩くして、こういった潜在的な需要にヒットできる商品をわれわれは作り出せないであろうか。さまざまな人々がさまざまな形態で参加できる、多くの企画が生まれなくてあろうか。そうすれば大きな自然保護環境保全の力が生まれそうだ。琵琶湖のヨシ原の保全・森林の管理・琵琶湖岸の清掃などやってほしいことはいくらでもあるのに…。

財団のひとりとごと  
hitorigoto

## 槍を置いた戦士たちから

